

ホロコーストの起源としての植民地主義

——スヴェン・リンドクヴィスト著『〈すべての野蛮人を根絶やしにせよ〉
～『闇の奥』とヨーロッパの大虐殺』（ヘレンハルメ美穂訳、青土社、2023年）

菊池恵介

戦後ヨーロッパでは、長らくホロコーストを「歴史上、類例のない出来事」として絶対化した上で、その原因をヒトラーの狂気や全体主義などに求めてきた。だが、本書によれば、特定の人間集団を「劣等人種」とみなし、「進歩」のためなら犠牲にしても構わないとする発想は、ナチズムの発明ではない。コロンブスの「発見」以来、西洋の名だたる科学者によって正当化され、南北アメリカ大陸やアフリカ、オセアニアなどで広く実践されてきた思想である。マルチニーク出身の詩人エメ・セゼールが『植民地主義論』（1955）で喝破したように、ナチスのユダヤ人大虐殺は、ある意味で、ヨーロッパの「外」で行われてきた蛮行を「内」に向けて炸裂させたにすぎないともいえる。

それでは、近代社会はいかにして人種イデオロギーや優生思想を創り出し、ヨーロッパへと逆輸入するにいたったのか。イギリスの小説家ジョゼフ・コンラードの『闇の奥』の一文（すべての野蛮人を根絶やしにせよ）を表題とする本書は、「文明化の使命」を掲げて新世界を征服した白人入植者が、先住民の支配を通じて新たな野蛮状態へと転落していくプロセスを、探検家や宣教師、政治家、科学者などの手記を手がかりに描き出していく。

著者のスヴェン・リンドクヴィスト（1932-2019）は、ストックホルム生まれのノンフィクション作家である。オセアニアの征服を描いた『無主の地（Terra Nullius）』、飛行船の発明にはじまる『空爆の歴史（A History of Bombing）』など、30冊以上の著作がある。その代表作にあたる本書は、1992年にスウェーデン語で刊行されて以来、15か国語に翻訳され、世界的なベストセラーとなってきた。二十年前にブリュッセルの書店で本書を手にして以来、私自身も何度も読み返し、多くの知的刺激を与えられてきた。以下では、「キュビエの発見」から「生存圏、死滅圏」にいたる後半部分を中心に、そのエッセンスを紹介しよう。

天地創造説から進化論へ

キリスト教の世界観では、神が創造した世界は完全無欠であり、その創造物が死滅することとはありえないと信じられてきた。だが、近代以降、地質学調査によって巨大な動物の化石が発掘されると、天地創造説に代わる新たな説明が求められるようになった。当時、その役割を担ったのが、地質学者や生物学者たちである。「フランス科学界のナポレオン」と呼ばれたジョルジュ・キュビエ（1769-1832）は、シベリアや北米で発掘されたマンモスの化石を分析し、それが「絶滅した世界」のものであることを明らかにした。なんらかの巨大な天変地異が発生し、地球上の大部分の生命が根絶やしになったのである。フランス革命のテロルを経験したばかりの同時代人にとって、それは衝撃的な発見であった。また、産業革命を経験したイギリスのチャールズ・ライエル（1797-1875）は、地質学的な変化が浸食や体積、隆起、沈殿といった緩やかな変化の累積の産物であることを明らかにした上で、そこから動植物の盛衰の原理を導きだした。すなわち、新式機械の発明によって職人たちの古い生産様式が淘汰されたように、自然界においても環境の変化に適応できない種族は淘汰される運命にあるとしたのである。一方、ライエルの弟子にあたるチャールズ・ダーウィン（1809-1882）は、動植物の観察から自然環境への適応を通じた「進化」のプロセスを明らかにした。

こうして天地創造説に代わる新しい世界観が形成されていったが、本書によれば、それが新世界の先住民が大量に死滅していった時期と重なるのは偶然ではない。実際、南北アメリカ大陸の総人口は、コロンブスが到達した時点で約7千万人と推定されているが、その三百年後には90%から95%が死滅した。特に人口密度が高かったカリブ海やラテンアメリカ地域では、先住民の90%以上がわずか百年のうちに死滅した。その大きな原因はヨーロッパから持ち込まれた病原菌にあり、必ずしも征服者の暴力のみによるものではない。だが、新世界の「発見」とともに、いたるところで「人口学的カタストロフ」が拡大したことから、これを合理化し、正当化する数々の言説が生み出されていった。

まず、最初に登場したのは「神の摂理」という宗教的な説明である。初期の北米入植者のダニエル・デントンは、「英語人の移住先では神が介入して、部族間の抗争や死に至る病などによってインディアンを取り除き、英国人のため道を整えてくださる」と1670年に日記に記している。だが、19世紀に入ると生物学的な説明が主流となり、「人種に関する何らかの自然法則があって、非ヨーロッパ人の絶滅は自然な発展の一環なのだろう」と考えられるようになった。こうして当時のヨーロッパで流行した「絶滅説 (Extinction theory)」に「科学」のお墨付きを与えたのが、ライエルやダーウィンらの学説であった。

若き日のダーウィンは、ビーグル号の乗組員として五年間をかけて世界を一周し、カリブ

海や太平洋の島々などの地形や気候、生物などについて幅広く記述した。とくに南米のパタゴニアに上陸した際には、ロサス将軍による先住民狩りを目の当たりにし、その暴力性に驚愕した（『ビーグル号航海記（1839）』）。だが、二十年後に『種の起源』（1859）を刊行して一世を風靡し、さらに晩年になって『人間の由来』（1871）を出版する頃には、新世界における先住民の死滅を「自然選択」のプロセスとして達観できる境地に達していた。

ダーウィンからヒトラーへ

こうして 19 世紀を通じて人種理論や優生学、社会ダーウィニズムなどの学説が生み出されたが、20 世紀に入るとヨーロッパに逆輸入されることになる。その橋渡し役を果たしたのが、後発国ドイツの科学者であった。19 世紀中葉まで、ドイツは工業化が進んでおらず、植民地も保有していなかった。ところが、1870 年代以降、国家統一を背景に植民地帝国の建設に着手し、原料供給地や商品の販路を求めて「西南アフリカ」（ナミビア）に進出する頃には、独自の人種理論を構築していた。その担い手の一人が『地政学』（1897）や『生存圏』（1901）の著者として知られるフリードリッヒ・ラッツェルである。

植民地帝国の構築を目指す「パン・ゲルマン主義連盟」の創設メンバーだったラッツェルにとって、領土の拡張こそ、ドイツ民族の生存条件であった。だが、すでに植民地の大半は英仏に領有され、「無主の地」は消滅しつつある。そこでドイツ民族が生き延びるためには、実力で新たな領土を獲得する必要があるとしたのである。こうしてラッツェルの「生存圏（Lebensraum）」の理論は、ドイツ帝国の対外膨張を正当化する理論として知識層に浸透していった。

だが、第一次世界大戦に敗れたドイツは、ベルサイユ講和条約で巨額の賠償金を課されると同時に、ベルリン会議（1878）以降、獲得したすべての植民地を戦勝国に奪われた。そこでリベンジを誓って登場したアドルフ・ヒトラーが目をつけたのが、ヨーロッパ大陸だった。「ヒトラーは『わが闘争』ですでに、ドイツとイギリスがどのように世界を二分すべきかを説明している。イギリスはすでに西アメリカへ、南のインドやアフリカへ進出したのだから、ドイツは東へ拡大するべきだ、と」。こうして、ズデーデン併合やポーランド侵攻を経て、1941 年 8 月にソ連侵攻に踏み切ることになった。ヒトラーの「植民地戦争」とホロコーストの始まりである。

本書によれば、ナチスの東方拡大の目的は、ドイツ民族の「生存圏」の拡大であり、その過程で繰り広げられたユダヤ人の大虐殺は、新世界の征服を通じて生み出されたジェノサイドの思想に由来するものであった。その至上命題こそ、「すべての野蛮人を根絶やしにせよ」

にはかならない。「ユダヤ人は、生存圏の理論に照らすと、アフリカの奥地で暮らす矮小の狩猟民族と同様、土地を持たない民族だった。ロシア人やポーランド人よりもさらに劣った人種、生きる権利を主張することもできない人種とみなされた。そんな劣等人種が邪魔なところにいるなら、根絶やしにしてやるのは当然」だとされた（245 頁）。いわば南北アメリカ大陸やアフリカの植民地支配を背景に形成されたジェノサイドの思想が、ナチスを介してヨーロッパに持ち込まれ、キリスト教文化圏における反ユダヤ主義の伝統と交差したところに、ホロコーストの悲劇がもたらされたというのである。

＊

第二次大戦後、連合国はナチスの戦犯や対独協力者の責任を追求する一方、植民地主義の歴史的責任を不問に付してきた。その暗黙の合意を問い直す契機となったのが、2001 年に南アフリカで開催された「世界人種差別撤廃会議」である。通称ダーバン会議では、カリブ・アフリカ諸国の代表団が奴隷制を「人道に対する罪」と認定し、その「補償（reparation）」を要求したのに対し、日本を含む旧宗主国の代表団は一丸となって反発した。「奴隷制や植民地支配は、いかにも不当行為であるが、当時においては合法だった。したがって、現在の法を過去に遡及して適用することはできない」と。こうしてカリブ・アフリカ諸国の要求は「法の不遡及原則」の壁にはじき返されたが、歴史的不正の補償請求運動は、その後も世界各地で繰り広げられ、近年ではオセアニア先住民への遺骨の返還やアフリカへの文化財の返還が始まるなど、少しずつ実を結び始めている。「過去の克服」のグローバル化は可能か。ホロコーストの歴史的起源をたどる本書は、21 世紀の植民地責任論を検討する上で、壮大なビジョンを与えてくれる。

初出：レイバーネット、2023 年 10 月 2 日